

1985年12月14日(土曜日)

終戦時史の再検討を迫る証言

特命憲兵少佐の回想記

中嶋 嶺 雄

小林 多美男 著 忘れられた墓標

第1部

9・1刊、4/6判・428頁、1600円

人間の科学社

頃、ソ連軍として著者自身が在籍した日本軍憲兵隊などが登場し、闘争や葛藤の渦の中で、この激動の時代を精一杯生きぬいた主人公、中田剛憲兵隊員に仮託された著者の生きざまが映し出されている。

久しぶりに熱い想いが心に残る書を私は読んだ。

本書は、現代中国史において、日中関係史においても、さらには「戦争と革命の世紀」としての二十世紀史にとっても、これまでほとんど照明が当てられなかった旧満州国の辺境、今日の黒竜江省南東部から吉林省延辺朝鮮族自治州を中心とする一帯にくりひろげられた戦乱の時代の記録であり、壮烈なドラマの現場証言でもある。

時代は満洲国建国からその挫折、日本の敗戦にいたる期間であるが、この激動の時代を渦中に身をおいて体験した著者は、張作霖、馬占山ら東北地方軍閥の支配が崩れてゆく状況下に當時この地に跋扈した山東の紅幫(ホンパン)、「紅槍会系」の匪団の掃蕩作をすすめるなかで出会った中国人との心と心の結びつきを主題にして、その戦争体験を内側から語っている。しかも、この舞台には、それらの匪団ばかりか、満洲族、朝鮮族、白系露人、日本人開拓団、居留兵、関東軍、八路軍、金日成軍、よつな立場で生き延びてきたのか。

中田によって語られる著者は、大東亜主義に共鳴して没頭しながら「没法子」(メイフアー)の(仕方がない)引用者)は中国人の宿意です。中国人の悲しみです。中田人の涙です。中国人の誇りなのです。でもそれは私達の生きるための力かも知れません」(二二七ページ)と語りつつ社会の底辺に生きる中国民衆に共鳴して日本の対露政策に疑問を懐くようになり、理想と現実のはざまを苦しめ、悲劇を極小化するために最善をつくした。

このような著者の信念と行動は、この激動の時代の大局を見抜く世界認識に支えられていたともいえます。「東条、ヒットラーをはじめ、ルーズベルト、蔣介石、スターリン、これら世界の指導者も皆その渦の中に踊らされながら、己れの墓標に向

中嶋 嶺 雄

未来に寄せる思い

潜在意識の中の真実を見分け

中山 士朗

中嶋 嶺 雄

られなかった者、哈爾濱大学、同文書院中退者、ガリガリの皇道主義者、社会改良主義者など多彩であった」中田らの合同外争班に示される人間模様が渦巻いていたのであり、中田自身、「マルキストではない、アナキストでもない。といつて今、日本を風靡している右翼でもなさそう」(二二二ページ)な理想主義者であったといえよう。しかし、このような理想も中田人にとっては「迷惑な誘い」(二四四ページ)と言つ著者は、最後に、「戦争は終わった。しかし昭和天皇の世紀は終わっていない」(四二二ページ)と重く語っている。

しかも、この間、安振有らの中国人や日本軍内部の善意のひとびと(上司の大造孝大佐や通化省警務庁の山岸、それに部下の森田、松原らの存在、朝鮮人でもありながら日本兵として勇敢に戦う武下兵長の姿を通じ、著者は人戦争と人間への問題を一貫して問いつづけている。同時に、彼自身がどうであった憲兵の役割とは何かを問うているといえよう。そして一般の見方とは逆に、この満洲地には、「思想的に日本に入れ

以上のような本書は、現代史の死角を照射し、中・朝・ソ・満辺境地域研究の対象領域をフィールドとしているという点でも、大変貴重なものである。一種のノン・フィクション小説でもあって、満洲の自然と風土を背景に様々な諸民族・諸集団が交錯する場面をリアルに描いている。本書の続篇を是非期待したいものである。(東京外国語大学教授)

G・V・ウォレビー 著

渋谷 徹 訳

閃光を見た人びと

7・31刊、B6判・224頁、1500円

新泉社

著者のG・V・ウォレビーは、心理学博士であり、またアブサラ大学助教授でもある。本書の原題は、「見上げた者と見下ろした者」となっているが、底本の背表紙には、「もしあなたが十万人の人間を殺したなら、あなたはそれをどう心理的に処理するか」という文句が記されている。記者あつき。この本の題名からも分かるように、

うに、心理学者である著者は、心理学の立ち場から広範囲に原爆を投下した人びと、つまり見下ろした者と、かろうじて原爆から生き残った人びと、つまり見上げた者を調査し、その者たちがどのような心理プロセスを経て今日生きているかを解明しているのである。原爆投下者と被爆者だけが知っている世界に著者があえて踏みこんだこと